

回				
覧				

No.4906(65-05)
2013.08.29(木)

第 105 回定期中央大会へ向けて

定期中央大会（9月13日（金））の開催が8月22日（金）に公示されました。9月2日から大会前日まで、東海地区においては分会長会議と一斉分会を実施します。組合員の皆さんは、積極的に討論に参加して下さい。

東海地区分会長会議

9月2日（月）、3日（火）組合事務所 12:20 から

活動報告、定期大会の開催について、一斉分会について

東海地区の分会長、または代理の方はどちらかの日に出席してください。

東海地区一斉分会

9月4日（水）から9月12日（木）

活動報告、大会議案書の概略、代議員の選出、その他

大洗支部、及び那珂支部では9月11日（水）にそれぞれ支部大会を開催します。

第 105 回定期中央大会

日時： 2013年9月13日(金) 13:45 から 17:15

場所： 東海村 真崎コミュニティーセンター 会議室

議案：

第 64 期の活動の総括と第 65 期の運動方針、

第 64 期財政報告、

第 65 期財政方針

そのほか

アンケート実施中

研究問題対策部の Web アンケートは 8 月末までの予定でしたが、期間を延長し、9 月末まで継続して実施することとしました。皆様の積極的な回答をよろしくお願いします。

インターネット検索から原研労のホームページにアクセスして下さい。ホームページの「研対ニュース」をクリックすると「[原研労組研対部アンケートページ](#)2013年7月30日（火）」が一番下に現れますので、アンダーラインの文字をクリックしてアンケートページへと進んで下さい。

アンケートページ (<https://genkenrouso.net/drupal/enquete2013summer>) に直接アクセスする方法もあります。アンケートページでアンケートを開始するには、「原研労組研究問題対策部アンケート」、「Go to form」または「続きを読む」のいずれかの文字をクリックします。

スマートフォンからもアクセスできます。自宅のパソコンがインターネット環境にない方のために、組合事務所に PC を用意してありますので、利用して下さい。組合事務所は夕方 6 時まで開いています。

中央委員会報告

8 月 28 日に中央委員会が開催され、定期中央大会の議案書構成案が承認されました。また、外部役員として科労協監査に湊太志さんが承認されました。中央委員会では、機構改革についての意見が出ました。大会でも大いに議論したいと思います。

給与の大幅削減特例措置を直ちにやめろ !!!

どこへ向かう原子力機構改革②

安全のために何が必要か？ 「安全文化」だけでは事故は防げない

「もんじゅ」の点検漏れ、J-PARCの事故で、「原子力機構の安全文化の劣化」という言葉がたびたび出てきました。「もんじゅ」のことは、良くわかりませんので、「もんじゅの安全文化」に関して反論はできませんが、機構全体の事のように言われるのは、容易には納得できません。原子力科学研究所(原科研)構内で起きたJ-PARCの事故については、原子力機構にも責任がありますが、責任が大きいのは、ハドロン施設を管理していた高エネルギー加速器研究機構(KEK)です。J-PARCで何が起きたか・行われたかを聞いて、多くの原子力機構職員はあきれてしまいました。理解できないようなKEKの備えであり、対応だったのです。30年前の原研でしたら、部署によっては、KEKの皆さんと大差ない感覚だったのかもしれませんが、しかし、原研では、この間安全に対する考え方を深めてきました。とくに、非管理区域の汚染が報告されていなかった事件や、地中からRIの容器が出てきた事件などを経験して、文化は変わって来ています。J-PARCの事故についていえば、原子力機構の手落ちは、もともと文化の違うKEKに対して、JAEAでは普通である安全に対する考え方をきちんと理解させる、あるいは守らせることができなかった点です。しかし、事故の主犯ではないです。

安全文化の「劣化」に、J-PARC事故を絡めていうなら、KEKの安全文化をまず改善しなければなりません。そこに触れずに、原子力機構ばかり責められては、多くの職員は納得しません。

「安全文化の劣化」という言葉には、別の違和感もあります。それは、「原子力安全文化」という言葉の使われ方にも感じます。この言葉が使われる時、何か小さなものを積み上げることで、原子力の安全が確保でき、それは、やれば簡単にできるはず、というニュアンスで使われているように感じるのです。原子力は、さまざまなもので支えられており、どの部分も大切であろうし、小さな部分であろうと思わぬことから大きな事故に至ることも考えられます。しかし、現在の原子力の問題はそれだけではありません。福島第一原発の事故は、そのような観点の安全文化で防げたのでしょうか。地震の想定を誤った、津波の想定を誤った、あるいは長時間の交流電源喪失は考えなくてもよいと思ってしまった、などは、小さな積み上げの問題ではなく、大きな想定上の誤りです。「稀にしか起きないことだが、起りえること」を無視した結果です。福島第一原発の事故は、そういうことを示しています。

「何をどこまで想定し、どこまで備えるか」という問題は、世間でよく言われる「安全第一」の一言で判断できるものではありません。稀にしか起らないように見えること、対策に大きな資源を必要とする事柄については特に難しいのです。それを、単純なことの積み上げのように考えるべきではありません。

文科省が示す改革の基本方向は、「もんじゅ」が持つ大きな問題に目を向けず、原子力の将来のために原子力機構が今後課題として考えなければならないことにもほとんど目を向けていません。福島第一原発の事故に何も学んでいないと言えるでしょう。